

日ごろ努力していること

自然観察について

清水 さよ子

この頃になるともう園生活にもなれて、登園後元気に遊ぶ姿が目立ってくる。夏のおとずれとともに、自然の中でのびのびと遊ぶ子どもたちの目はたえず新しいものを求めてかがやいている。幼児の身辺にあるものはすべて観察の対象となり、めずらしいものを興味をもってみる。さわって実験してみようとする。時には体ごとそのものにつかかっていくこともある。このような幼児の欲求を満足させ、かたよりのない生活経験を与え、正しい観察態度を身につけさせるためにどのような指導をしたらよいか。豊かな環境設定の中で幼児自身積極的に観察がおこなえるようにじゅうぶんな時間を与え、存分に直接ふれさせ、その中からぎもんを持ち、考え、話し合えるような態度を育成するよう心がけている。

私の園ではとくに自然環境に乏しいので、日常の生活の中で自然に動植物に親しみをたすよう考慮しており、この実体をいくつかの例をあげてのべてみたいと思う。

地域の状態

◎商店街が多く交通がはげしい。広い場所でのびのびと遊ぶことができない。遊び場として店内、道路、家が多い。しかし新宿御苑が近くにあるのでいくらかすくわれている。街には映画館、デパートなど大きな建物がいくつもある。映画もみているし、デパートにも多く入っている。

◎家業が忙しくゆっくり子どもと共に家族でたのしむことが少ない。

◎家庭でのテレビ視聴が多く、簡単にたのしむ方法をしている。
◎新しい玩具などは買わないまでも、デパートでみている場合が多い。

子どもの状態

◎一般の動作はきびんであるが、落付きが欠けている。

◎自然のものはめずらしがってみるが、観察的態度が未熟である。

◎玩具など、完成されたものの扱いは上達している。

◎環境として完成されたものが多すぎ、その過程に対する知識が欠けている。

指導の実際

◎朝顔の栽培

目標Ⅱ植物の成長の過程をしらせ、植物を愛育する心を養う。

内容Ⅱ土に親しむことが少ないので、土じしらえから子ども自身にさせ、個人個人に植木鉢を配布して興味をまじつつ継続観察する

よう指導する。

幼児の経験と指導

土いじりの機会の少ない子どもたちなので非常によく育てる。種をまく時年少組だとすぐに芽が出るものと思いきや土をほじくってしまふ子どももいる。植物の成長について話し合ったり、共同の箱にまいてときどき成長のようすをみせるようにしている。発芽までは期待をもっているので関心がつよい。しかし幼児に継続観察は無理で、発芽のあとは、つる、葉のめにみえた成長、蕾、開花など、変化のある時を利用して、また教師がたえず注意し興味をもって観察しつつ幼児の興味をよびおこさせる。友だちの朝顔と、のびかたの違い、葉、花の色の違いなど比較観察する。プランコの柵、垣根にも共同で種子まきをし、組全体の責任で世話をする。よく世話をすることにより、植物がよく成長することをする。朝顔の他に、ヒヤシンス、チューリップ、水仙などの球根による栽培もおこない、狭い園庭ではあるが出来るだけ、緑の木、実のなる木を植えて、自然の植物に接触できるように注意している。

◎飼育している動物

亀

目標Ⅱ幼稚園で簡単に飼える金魚や、かめを飼育し魚類の生活について興味をもたせる。

内容Ⅱ特に夏の飼育に注意し、実際にふれながら観察させる。

幼児の経験と指導

まず亀にさわってみる。こうらが固いのですぐにもち上げて地面に降す。亀も首を引っこめたり足をこうらの中に入れてしまったりするので幼児の興味をますますひきつけ、じっと見守る。コンクリートの校庭をぬれた足で歩くあしあとの面白さ、兎と競走させようとする童話的な面白さ、自分の椅子の上を歩かせて落ちた時こうらに足、首を入れる実験的な面白さ、このようなことからだんだんと観察が深まり、よくみる態度が出来てくる。水をかいて泳ぐこと、ときどき首を出して呼吸する。ときどき岩に上って、こうらぼしをする。頭、足の特徴、餌の食べかた、こうらの模様など細かい観察をする。じゅうぶん観察が進むと高いところからおとすこともなくなると、餌を積極的にさがしたり、遊んでいる時みみずをみつけたりする、「亀にあげよう」と遊んでいても動物のことを思いおこすようになる。長期間にわたりたえず身近に接しているうちに動物に対する親しみと愛育の精神が培われていく。

兎

目標Ⅱ飼育の手伝いをさせてきた兎について経験を整理することに
よって、兎の餌、動作などをまとめ、動物に親しみ、愛護の精神を養う。

内容Ⅱ飼育の手伝いをする。庭あそびの時小屋から出していっしょ

に遊ばせながら観察をおこなう。

幼児の経験と指導

飼育の手伝いは主に餌をやることであり、餌をやることはほとんどの幼児の好むことである。

餌をやりながら食べかた、餌の種類など観察している。庭あそびの時は小屋から出し、抱いたり、砂場に兎の家を作ってあげたりする。人間の生活と同じようにねるところ、便所も作っている。こうして遊んでいるうちに兎の体は温い、目の色、耳の状態、歩きかた、はねかた、土をほるようすなどをみたり、兎のそばで音を出して兎がどうするかためしてみたり、形態、習性に関するものと多方面の観察を積極的に自然におこなっている。時には校庭、砂場で一列円型に並んで兎の中にはなし、組全体で話し合いながら観察することもある。水のそばにつれていかないこと、耳をもたず両手で抱くこと、など教え、兎のすべりかたをみるためにすべり台の上からはなしたり、遊ばすつもりでブランコにのせたりすることは注意している。

兎にかぎらずどんな小さな動物でも生命のあるものを尊重することとは幼い子にもはつきりとしらす必要があると思う。

にわとり

目標Ⅱ飼育している鶏について餌、動作、卵、他動物との比較など経験を整理する。

内容Ⅱ年長組三学期の予定であるが六月にひよこが生れたので、目標までは達成出来ないがひよこを中心に観察した。

幼児の経験と指導

一羽生れたひよこであったが、縁日などでみるひよこしかしらない子どもたちである。生れて二日目ぐらいに、ひよこが生れたことを話してそっとみにいく。よちよちあるいているひよこをみて大喜び。活潑に話し合いが展開され、質問が出る。流感で一週間の休園後かわるがわる小屋の前に行つてはひよこをみていた。子どもたちがひよこをみてしまったことは、

○今までひよこは黄色だと思つていたがこのひよこはそうでなかった。

○ひよこと親鶏の鳴き声の違いを實際にきいた。

○母どりの背のつたり、羽の下にもぐる。

○生れてすぐに早く歩ける。

○歩き方がかわいいが、まだしっかり歩けない。

○雄はあまりひよこをかわいがらない。

休園後

○体の成長の早いにはおどろく。

○雌と同じような色のひよこになる。必ず雌と同じのが生れるの

か(質問)

○小さな羽ばたきをしたのを見て、「羽がはえてきた」といい、羽

の成長に関心をもつ。

ひよこが生れたことにより親どりに対する関心が深まってきた。雄雌の体の違い、餌の種類、餌のたべかた、運動の仕方、羽および脚の観察がおこなつた。ひよこが雌のあとをおいかけて枝にとび上ろうとするがなかなかとび上れず、長いことかかつてやっととびあがる。このようなようすも自分たちがとびあがるような気になつて力を入れてみている。小屋の中には入るが直接兎のようにふれて遊ぶことは出来ない。

◎飼育、栽培している動植物に関連して

小鳥の餌

公立小学校に併設している園では土の面積が少ない。園庭は遊び場と池と出来るだけの木、草をうえている。保育室の前はコンクリートの校庭である。木箱に土を入れていたが、給食用の古流しをゆずりうけて保育室の前におき、三分の一を亀、金魚の飼育用に水を入れ、三分の二は土を入れて季節の野菜を栽培する。主に菜の類でこれは子どもといっしょに世話をし、飼っているカナリヤ、十姉妹の餌にする。子どもたちが育てた菜を自分たちの手でとつて小鳥にやることは、菜の観察、小鳥の餌のたべ方の観察だけではない。子どもの心に生物を愛する気持が、自然とわきたっていくであらう。

給食用に(卵、二十日大根など)

○鶏が卵を生むと、頬につけてみる。『あったかいよ』と次々にまわして子どもの頬に。『この卵どうするの』と幼稚園で生れた卵をどうするかと気にかかる。本園では昼食時にみそ汁の給食をしているので生まれた卵は給食にたりにだけに集める。いよいよまた今日のみそ汁に入れるという時のよろこびは格別である。卵をわる子どもたちは上手にわることができるようにと真剣である。

○二十日大根も簡単に育てられるので、木箱に土を入れて世話をする。特に赤い色になるので喜び、土から赤い玉をひょっこり出しているのには土をかぶせたり、ときどき土をほじって色、大きさをのぞいてみたりする。大きくなると全部ぬいてうすく切り、色のあざやかさを残すために酢につけて一切ずつ食べたりする。毎月与えられるだけでなく、時には生産の手伝いをしながら変化のある給食をたのしんでいる。

◎雑草

夏にはえた雑草は大切な環境の一つである。夏休み中に30cm位のびた雑草が園庭にはえ、夏休み後これを見つけた子どもたちはプランコよりも、すべり台よりも、先にこの草の中にとびこんでいく。虫をみつめる。草の種類をみる。草をぬいて遊ぶ。思い思いに雑草を百パーセント利用する。秋にする虫の観察もこの雑草のおかげでじゅうぶん出来るのである。

これらの経験は一つ一つの観察にも意義はあるが、観察の精神は一貫したものであり、多くの経験を得ることにより、正しい観察態度が徐々に培われていくものと思う。

以上の実体は地域的に、自然に経験することの出来ないことがらを特にとり入れておこなっている実例である。まだまだ設備としてもっと広く自然に近い兔小屋、にわとり小屋もほしいと願っている。

動植物のほかに、自然界に関するもの、科学的な遊びなど、観察場面は広い。観察指導の材料として実物を扱うことはもちろんであるが、多くの素材も用意しておき、自発的に工夫して遊びをおもしろくしたり、効果的にしたりすることも必要と思う。教材としては、今まで利用していた新聞、写真、図鑑、標本の他に放送教材を使うことにより、園での観察と直接結びついたり、地方の生活、自然界のようす、身近にない動物、玩具工場など今まで取り入れにくかったことが、動的に感覚的に受け入れられるようになり、最大限に活用している。

(新宿幼稚園)

× × ×